



海外留学支援制度（協定派遣）プログラム  
事前・事後研修 事例紹介

# フィールド調査から学ぶ開発経済学 と途上国ビジネス

関西学院大学 経済学部 准教授  
栗田 匡相

## 目次

1. 関西学院大学の概要と海外派遣増加の背景
2. 本プログラムについて
  1. 概要
  2. 事前学習
  3. プログラム実施時
  4. 事後学習
3. 効果測定・アセスメントとプログラム改善
4. 参加者の長期留学などその後の活動状況
5. コロナ禍での対応について
6. まとめ

# 関西学院大学の概要と海外派遣増加の背景

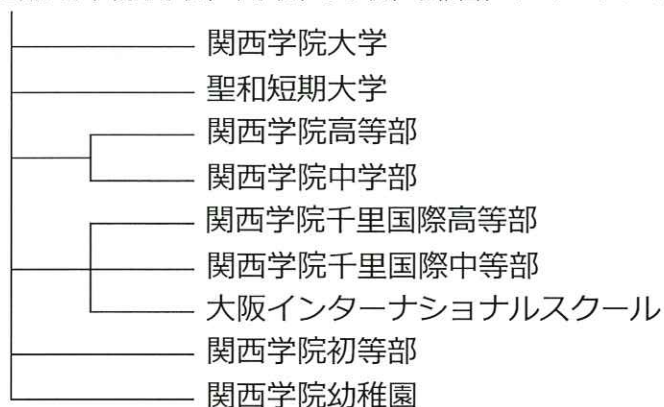
## 関西学院大学の概要



## 関西屈指の総合学園

### 学校法人関西学院

11学部、14研究科からなる総合大学の関西学院大学をはじめ、短期大学、高等学校、中学校、小学校、幼稚園、インターナショナルスクールを備えた総合学園です。



- |    |                   |
|----|-------------------|
| 1校 | 大学                |
| 1校 | 短期大学              |
| 1校 | インターナショナル<br>スクール |
| 2校 | 高等学校              |
| 2校 | 中学校               |
| 1校 | 小学校               |
| 1園 | 幼稚園               |

関西学院大学

# 11学部 14研究科

学部生23,885人、大学院生1,246人（2020年5月）

西宮上ヶ原キャンパス

- 神学部
- 経済学部
- 文学部
- 商学部
- 社会学部
- 人間福祉学部
- 法学部
- 国際学部

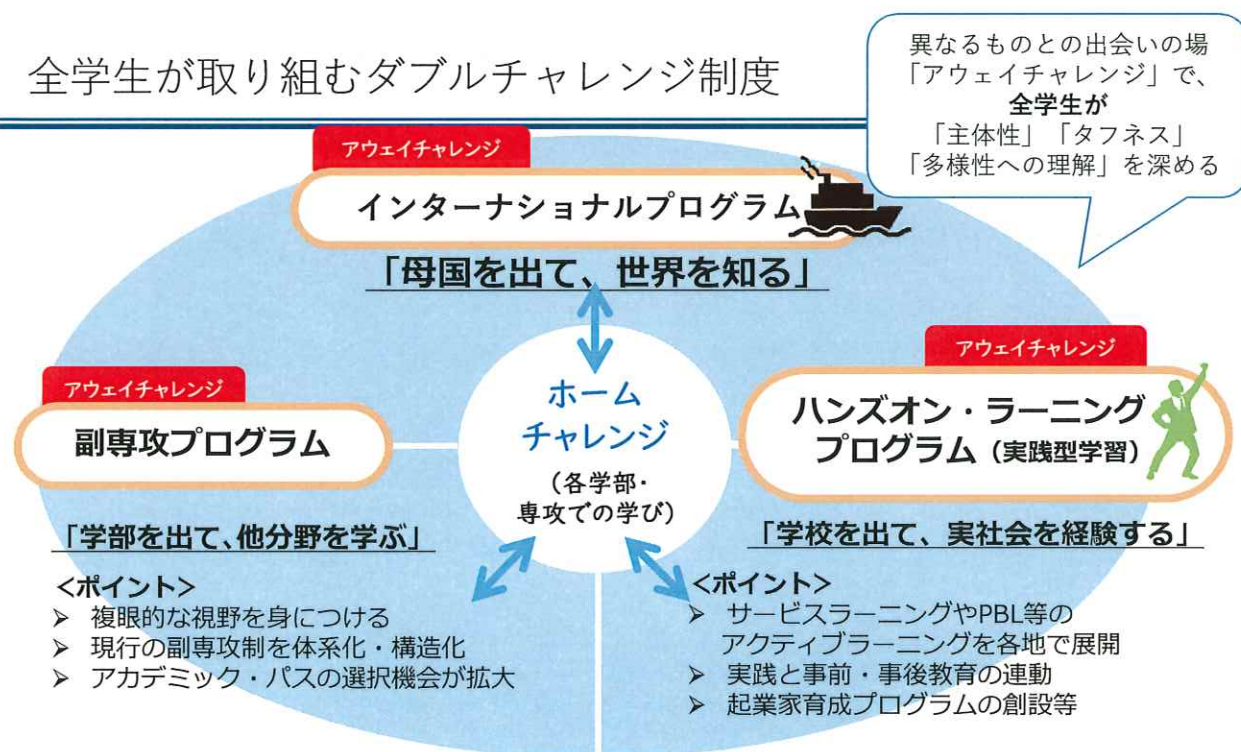
西宮聖和キャンパス

- 教育学部

神戸三田キャンパス

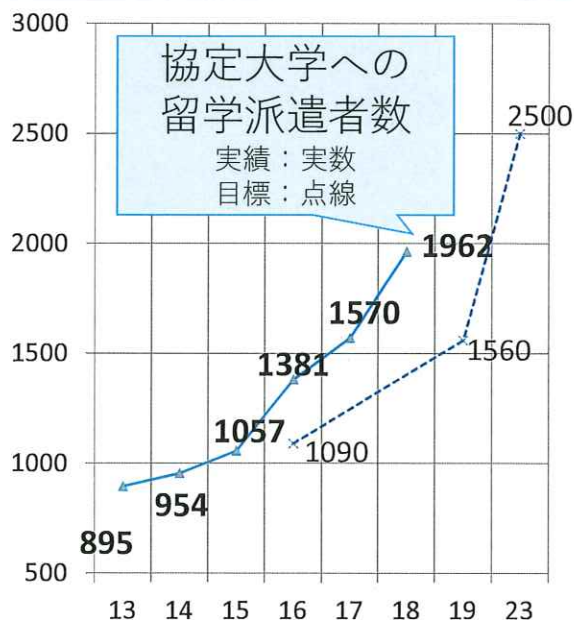
- 総合政策学部
- 理工学部

## 全学生が取り組むダブルチャレンジ制度





## インターナショナルプログラムで海外派遣急増中



## 海外派遣急増の背景

### 1. 学部・研究科提供プログラム拡大

- 「国際センター出島型」国際化からの脱却をはかる  
全体に占める国際センター提供プログラムの比率は  
2013年度94%→2018年度80%に
- 学部・研究科でのプログラム開発推進のため体制整備  
特別予算枠の設計、危機管理・保険の一元化等

### 2. 学生の背中を後押し

- 奨学金制度の充実（短期留学も支給対象に）
- 留学アドバイザーによる留学相談を拡充

# 本プログラムについて

---

本プログラムについて



## 概要

---

**主な対象学年：**3年次学生

**活動内容：**アフリカ諸国（セネガル、マダガスカル、エチオピアなど）での1ヶ月間に渡る農村調査とインドネシアバリ島での1ヶ月半に渡るインターンシップで構成される。農村調査では現地政府、大学やJICAなどのサポートを得ながら1000世帯以上の詳細なデータを収集し、論文を執筆する。インターンシップでは主に観光産業（ホテル、旅行会社、日本語学校、現地出版社など）における業務に従事し、観光客調査なども併せて行うことで、単に海外で就労経験を得るというだけではなく、観光業の定量的な分析を付加することでより深い学びを得ることが出来る。





## 本プログラムの特徴

- ① 徹底的な実践型プログラムであること
- ② 参加学生が把握・消化しきれないほどの活動を提供していること
- ③ 事前学習・事後学習がゼミナール活動に基づく専門演習指導であること
- ④ 学部カリキュラムとの連携が統合的に取れていること
- ⑤ 成果のアウトリーチが徹底していること
- ⑥ 事後活動を多方面に展開していること
- ⑦ 学年横断的なつながりを作り出せること
- ⑧ 参加学生と一般学生との学習習熟度や能力水準が大幅に異なること



## 事前学習について

### 2年次秋学期

- 標準的な経済学・統計ツールの知識・技能を習得

### 2年次春休暇

- 専門レベルの論文を読み込むための学力を養成

### 3年次春学期

- 研究論文を読み込み専門的なResearch Questionをたて、調査の設計を行う

一般的な海外渡航プログラムとは異なり、ゼミナール教育に即した形で行われるため、長期に渡る準備期間の確保、参加メンバー間の協力体制の確立、学部カリキュラムを有効活用した学習、そして高度な専門的指導が可能となる。

- 専門基礎、計量経済学等専門科目履修がプログラム参加の前提
- 渡航前に論文グループごとに100本以上の英語論文をサーベイする
- 参加する学生は、ゼミの先輩等のアドバイスによって、自主的に派遣前にTOEIC600～900点まで高めている。目的が明確なため学修へのモチベーションが高い。
- 経済学以外の他分野の書籍などを30冊程度読み込み、学生同士で議論する。

## プログラム実施時



### アフリカ農村調査

- 1000世帯規模の大規模調査
- 農村でのホームステイ
- 現地通訳学生と英語でコミュニケーション
- 現地で実施されている援助政策普及のサポートを実施



### バンコクでの交流

- チュラロンコン大学の学生とバンコク屋台・飲食店調査、PRのためのCM動画作成
- 日本でも相互交流
- バンコクの大都会とアフリカ農村との格差を実感



### バリ島インターン

- 観光産業でのインターン
- 観光客やレストランなどへの調査実施
- ビーチクリーン活動などの環境保護イベントの企画・運営

- 全体で2ヶ月半程度のプログラムだが、一般的な海外渡航プログラムとは異なり、実施目的の異なる複数のアクティビティを組み合わせることで、学生には消化しきれないほどの学習の機会を提供している。また徹底した実践型プログラムのため、単に知識を詰め込むだけではなく主体的に行動する力や豊かな人間関係を築く力も磨かれる。
- 本プログラムでは参加学生が、経済学などの知見を用いるだけではなく、自らの身体、感性をも総動員して深く世界の現実と向きあうことが要求される。こうした意図を持って設計されたプログラム故に、参加者は幅広い専門性や知識、経験を積めるだけでなく、多様性への理解や困難を乗り越える粘り強さ、よりよい社会へと変

## 事後学習（3年秋学期）について

1. 調査データ（アフリカでの農村調査、バリ島での観光調査）を用いた論文執筆を行い、学生論文大会（ISFJ、WEST、JJ政策フォーラムなど）で報告する。
  2. JICA東京本部において、マダガスカルと衛星回線で結び、調査報告・提言を行う。こうした提言がマダガスカルでの実際の援助政策に採用されている。
- マダガスカルで集めたデータは調査世帯数が1000世帯以上、人数にすると5000名を超える調査で、更には調査項目数が数百にもものぼるため、データ入力とそのクリーニング作業にかなりの時間を要する。参加者が帰国するのが10月初旬であるにもかかわらず、論文大会の論文提出締め切りは11月初旬のため、帰国後も論文執筆の作業に文字通り忙殺されることになる。
  - また、同時に3本の論文執筆に関わる学生も毎年数名おり、消化しきれないほどの多様な経験をするだけではなく、アウトプットの面でも質、量共に学部学生のレベルを遙かに超えた作業に従事することとなる。

単に質の良いプレゼンや論文を書こうという意識だけではなく、マダガスカルの貧困削減やバリ島の持続可能な観光開発のために自分自身は何が出来るのかという当事者意識を持ち、世界との実践的な関わりを意識できる資質を養う



## 事後学習（3年秋学期）について（続き）

---

### 経済学部栗田ゼミ生がマダガスカルで調査した論文が特別優秀賞に！

経済学部栗田匡相ゼミ（開発経済学）の3年生チームが執筆した論文「マダガスカルにおける稲作技術」が昨年12月13、14日、明治大学で開催された「ISFJ日本政策学生会議政策フォーラム」で優勝にあたる特別優秀賞を受賞しました。昨年末には、JICA東京から衛星中継でJICAマダガスカル事務所に政策提言する機会を得ています。

「ISFJ日本政策学生会議政策フォーラム」は、全国の大学生が1年間の研究成果の集大成を競い合う論文の大会です。2014年度は京都大や慶應義塾大など国公私立22大学から130本の論文が応募されました。多くの論文が文献からのデータを収集している中、栗田ゼミの論文は現地調査から得た「生のデータ」を用いた政策提言、学生が肌で感じた現地の様子を織り交ぜた点が特に評価されました。（2015年1月）



## 効果測定・アセスメントとプログラム改善

---



## 効果測定・アセスメント

- 担当者は、大学教育においても、指導は原則として1対1で行われるものと考えており、学生の声を聴く面談を多く開催している。年間を通して（ゼミナールでの通常学習時間を除いて）、こうした面談に200時間程度を費やしている。
- こうしたプログラムの効果を定量的な指標で測定をするのは難しいが、卒業後の進路変化、論文大会での受賞、公的助成金の獲得、ゼミ活動への意識変化（積極的な後輩指導など）、といった成果を次々とあげている。

### Smilocal活動の事例（国内ゼミナール活動の一環で研究と実践の両立を目指す）

#### ▼尼崎市の観光開発（兵庫県尼崎市）

兵庫県阪神南県民センターから「大学生による地域連携推進支援事業」の助成を頂き、尼崎市の観光開発に従事！



#### ▼過疎地域の地方創生（丹波篠山市）

兵庫県「安らぎと活力に満ちた地域づくり（大学連携の取り組み）」の助成を受け、丹波篠山市後川地区のまちづくりに参加！



## プログラムの改善について

大幅な改善は必要ないと考えているが、より多くの学生に本プログラムでの学習を体験してもらいたいと思い、海外渡航への部分的参加を認め、二つのフィールドワーク授業を立ち上げ、ゼミ生以外にも門戸を開いている。

#### ▼アフリカ研究

セネガル・マダガスカル・エチオピアなどでの現地調査に参加し、現地での生活を体験



#### ▼アジア地域の観光開発

インドネシアバリ島におけるインターンシップと調査を通じて観光開発について実践的に学ぶ



## 参加者の長期留学などその後の活動状況

---

参加者の長期留学などその後の活動状況



### プログラム後の活動について

---

#### **経験学習スタイルの身体化（研究と実践の両立を当然のものとする）**

- 卒業論文の執筆では、二次データに依存せず、国内外問わずデータ収集をする学生がいる。
- プログラムでの学びを帰国後も実践を通してアウトプットしていくための活動として以下の3つの活動を展開している。当ゼミ参加学生は、以下の3つのいずれかに所属し活動を行っている。

#### **Book For Children（BFC）**

「絵本でつながる世界の笑顔」途上国の子どもたち1人1人に、夢のつまった絵本を作って届ける活動をしています。

#### **Creating Happiness Journey（CHJ）**

バリ島を中心に持続可能な観光業の発展について研究・実践活動を行なっています。バリの若手デザイナーとの商品開発やバリ島情報の発信などを行っています。

#### **JASID-JASNIDS（JAS）**

「貧困なき未来へ」JASID-JASNIDSは、国際開発学会との連携のもとで国際協力や国際開発に取り組む学生ボランティア・ゼミ生の皆さんを、「つながり」をテーマに支援する団体です。フェスや論文大会、学生ネットワークなど、魅力的なコンテンツを続々と打ち出しているので、是非ご参加ください！



# プログラム後の活動について

**マダガスカルの子供たちへ  
関学生ら絵本作成**

マダガスカルの子供たちに送る絵本の作成が、関西学院大学の学生らによって行われた。関大の学生らは、マダガスカルの子供たちに送る絵本の作成に、マダガスカルの子供たちの生活や文化をテーマにした絵本を作成した。関大の学生らは、マダガスカルの子供たちに送る絵本の作成に、マダガスカルの子供たちの生活や文化をテーマにした絵本を作成した。

**勉強、友情の物語**



関大の学生らは、マダガスカルの子供たちに送る絵本の作成に、マダガスカルの子供たちの生活や文化をテーマにした絵本を作成した。関大の学生らは、マダガスカルの子供たちに送る絵本の作成に、マダガスカルの子供たちの生活や文化をテーマにした絵本を作成した。

**マダガスカルと交流授業**

関大の学生らが、マダガスカルの子供たちに送る絵本の作成に、マダガスカルの子供たちの生活や文化をテーマにした絵本を作成した。関大の学生らは、マダガスカルの子供たちに送る絵本の作成に、マダガスカルの子供たちの生活や文化をテーマにした絵本を作成した。

BFCの活動が新聞（毎日、神戸、読売、産経）に掲載されました。

同初等部と南宮市立西宮小学校が連携して、小学生が描いた絵本を、関大の学生らがマダガスカルの子供たちに送る絵本の作成に活用する。関大の学生らは、マダガスカルの子供たちに送る絵本の作成に、マダガスカルの子供たちの生活や文化をテーマにした絵本を作成した。

# 卒業後の進路について

- 経済学部は例年大学院進学者が数名と少ないが、このプログラム参加者（栗田ゼミナール）からは毎年進学者が出ている。経済学部には30を超えるゼミがあるが、毎年大学院進学者を輩出しているのは当ゼミのみである。昨年はどうとう開発学では世界的に有名な海外の大学院（The Institute of Development Studies University of Sussex）へ直接進学するものも出てきた。大学院進学希望者は今年もおり、既に一橋大学大学院経済学研究科、大阪大学大学院公共政策研究科に進学する予定。また、現在3年生の学生でも大学院進学希望者が複数いる。
- 学生の就職先としては、経済学部の4割近い学生が就職するといわれる銀行、保険など金融関係は少なく、メーカーや教育業界などが多い。海外での活動の面白さを体験した学生が就職先として、海外転勤などがあるメーカーを選んだり、あるいはアフリカ諸国の子ども達がまともな教育を受けられずにいる状況を目の当たりにして教育業界への就職を希望する学生が出るなど、本プログラムの経験がその後の進路に与える影響は大きい。

2019年度卒までの全進路データが以下に掲載  
<https://kurikuriresearch.wixsite.com/main/career>

# コロナ禍での対応について

コロナ禍での対応について



## Withコロナ・Afterコロナの学び

2020年度の海外渡航はコロナウイルスの影響で中止となったが、感染対策を十分に行った上で、国内での活動を可能な限り行っている。Smilocal活動と称される活動は11あるが、それら全ての活動で調査や実践活動を行い、今年度も当ゼミに在籍する学生の全てが実践的な研究活動に従事できている。

2021年度は3・4年次の学生が同時に渡航するため、30名以上の学生が同時にマダガスカルを訪問するため調査規模もこれまでの最大となる。またこれまでプログラムが継続してきたため、学生達が立案した援助プロジェクト（給食の提供や学習のサポート、保険提供、農業近代技術の普及などを含む）を現地で始動する予定。





## まとめにかえて

---



### まとめにかえて

---

- 本プログラムを実施する期間は実質的には2ヶ月半程度だが、これは2年半をかけた学習プログラムといえよう。これを可能にするのが、ゼミ教育に即したプロジェクト展開を行っているからである。
- 本プログラムは、関西学院大学が人材育成目標として掲げている「"Mastery for Service"(隣人・社会・世界に仕えるため自らを鍛える)を体現する世界市民」の育成を念頭に、国際的な視野を有し、高度な能力を有したグローバル人材（主に海外で活躍出来る人材）を育成するために行われている。しかし、世界市民を育てるには時間が必要であり、担当する教員の忍耐力、総合力も求められる。
- しかしそうした対応が可能であれば、学生は予想もしえないほどの成長を遂げることが出来ることは本プログラムで十分に実証されており、その意味では、教員や運営側が学生の潜在的な能力を過小評価しすぎているといえる。
- 本プログラムは現在の日本の大学が有する一般的な学習環境の中で、学生の学びを正攻法で徹底的に追求した場合にどうなるのかを示したものとも言えるかもしれない。海外渡航というイメージが先行したイベント的なプログラムを増やすのではなく、大学というアカデミックな場での学習を中長期的な視点から徹底的に正しくプログラムに取り込めば、学部カリキュラムとの整合性も取れ、深い学びの環境、機会を学生に提供できる。グローバル化が進み、VUCAでSociety5.0などと呼ばれる時代を生きていくためにはこうしたプログラムが増えていく必要があるだろう。



Thank you for your kind attention!!

